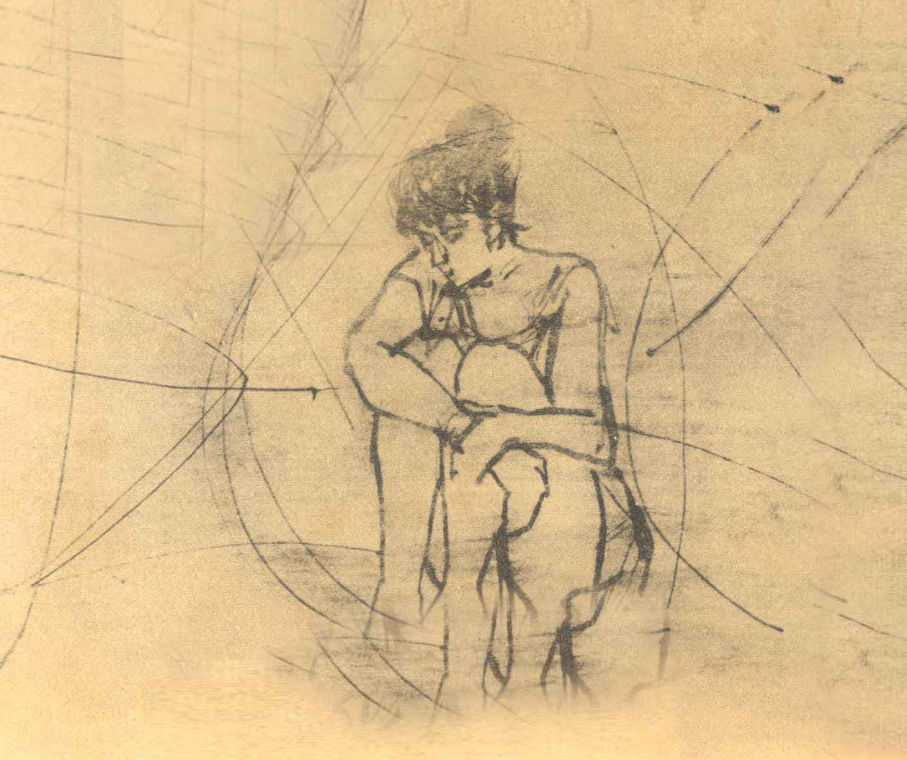


死んだ時代

三好徹



死んだ時代 三好 徹

死んだ時代

検 印

昭和三十六年十一月五日 印刷
昭和三十六年十一月十五日 発行

定価 三〇〇円

著 者 三 好 徹
発行者 豊 島 清 史
印刷者 木 村 史 郎

発行所

株式会社

光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(三三)〇二三八番
振替東京五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

序章 廃墟の町

七

第一章 歪んだ罨

一四

第二章 異邦人

一〇

第三章 墜落

一五

第四章 闇のはじまり

二四

第五章 手さぐり

二九

第六章 若い恋人たち

一三

第七章 老いた刑事

一四

第八章 古い傷跡

一五

第九章 夜の終り

一六

第十章 死んだ時代

一八

終章 断崖の村

二三

装
幀

宮
島
美
明

死
ん
だ
時
代

死んでしまったからといって、死者たちはそう簡単に時の流れから解放されない。

——ピエール・ガスカール

序章 廢墟の町

そのころ、東京は瓦礫の町だった。焼けただれたトタン板やベニヤ板でつくろったバラックが、多くの人々の棲み家だった。焼け残った建て物がなかったわけではない。が、それは勝利者が眼をつけ、そして、かれらのものとなった。

大部分の人が、倦怠と絶望のけだるさのはっきりと知れるのろのろした動作で、起きたり寝たりした。それはかれらが飢えているためでもあった。

この瓦礫の曠野に似た都会の西北の片隅に、コンクリートの高い塀で囲まれた一劃があった。町の住人たちは、ひんぱんに襲ってくる停電に悩まされたが、そこだけは停電もしらず、そこどころか、一晩中贅沢に光をまき散らし、見るものの眼に嫌悪の色をさそった。そのくせ、人々は SCAMMO PRISON と横文字の掲げられているその建て物の前を通るときは、猛獸を懼れる小動物のように背を丸め、足音までもしのばせるようにして歩いた。門柱の両脇に立っている赤毛や褐色の

髪のガードたちは、そういう日本人たちをつまらなそうに眺めながらガムを噛み、たまに女が通ると、陽気に口笛を吹いた。

津田神父は、自分の内がわに重くのしかかってくるものがあるのを感じながら、その門をくぐった。そのときだけ、陽気なガードたちはちよつと神妙な顔になった。

寒気が夜の底に沈んでいた。冷たい風が地を這うようにして、黒いスータンをふくらませる。だが、津田はほとんど寒さを感じていなかった。これから仕遂げねばならぬことがかれに緊張と重圧を与え、寒気を意識するゆとりをもたせないのだった。

かれは、これまでも何人もの男に別れを告げてきたのだが、そのことに決して馴れることはできなかった。津田がその任務を教区長から与えられたとき、これは死にゆくものを神の御心のままに天国へと導くための先達なのだ、と自分自身に言い聴かせたのであるが、最初の一人を送ったときくらい、つらさはますますばかりだった。津田は、そのことを神を信ずる心の足りないためだ、というふうに着えていた。そう考えることが、かれ自身にも救いをもたらしているのだとは気付いていなかった。

所長室へ着くと、所長のスマスが津田の姿を認めて立ち上った。スマスは左腕に巻いたMPの腕章をちよつとズリ上げながら、津田に何か言った。津田は英語があまり上手ではない。むしろ、ほとんどできないと言つてよかった。にもかかわらず、津田は、スマスの横にひかえている通訳が口を開く前に、相手のしゃべった意味を理解できた。

津田は部屋の隅にある木の椅子に腰をおろして待った。スミスは机の上のブザーを鳴らして部下を呼ぶと何か命じた、部下は敬礼して部屋を出て行き、十分ほどすると戻ってきた。あとを追うようにして数人の男が部屋に入ってきた。室内には、一種の麻痺状態のような緊張があふれた。

一団の男たちは、一人をのぞいてはMPばかりだった。部屋のなかにいる日本人は、津田と、いまMPに連れてこられた杉浦勝夫だけだった。

杉浦は津田を見て、かすかに全身をふるわせた。かれは、自分がいま直面している事態を正確に理解したらしかった。なにかを祈るように眼をとじると、すぐに開き、ついで意外にしっかりした足どりでスミスの前へ歩み寄った。よりそうようにして、MPが杉浦の両脇に立った。

スミスは、朱を注いだような猪首をふりながらしゃべった。通訳がそれをアクセントの変な日本語に直してきかせたが、杉浦の眼はそのあいだじゅう暖房のために水蒸気のかぶりついている窓、その窓の向こうに横たわる暗いひろがりを見つめて続いていた。

スミスは、最後の言葉を吐くと、小さく、アーメンと言ひ。十字を切った。

杉浦がうなずくと同時に、両脇のMPたちが抱くようにしてかれを室外に連れ出した。津田は十字を切り、静かにそのあとに従った。スミスはちょっと口もとをゆがめ、拳銃を腰に吊るすと、一番最後に部屋を出た。

処刑台をおさめた建て物は、所長室から歩いて五分ほどのところにある。そこへ行くまでのものかげの要所要所には、MPたちが完全武装してひかえていた。かれらは、同僚にひきまわされるよう

にして歩く日本人を、さすがにちょっと暗い眼で見送ったが、ガムを噛む口は一瞬たりとも動かすのを止めようとはしなかった。

道いっばいに敷きつめられた小砂利がサクサクと鳴った。津田は、しかしながらその音を耳にしなかった。かれの心は、死に行くもののものでいっばいになっていた。死を前にひかえたものが、最後に爆発させるかもしれない生への抵抗に備えて配置したものであるにせよ、それは神に対する冒瀆ではないか。神の眼からすれば、あのMPたちも自分も、すべて死刑囚にひとしい存在なのだ。

そう考えたとき、津田神父は、かれの周囲にひしめいている烈しい寒気を、はじめて意識するこ

とができた。

一見したところでは倉庫のように見える刑場の内部は、三つのブロックにわかれている。入口の小部屋には机と祭壇があり、その奥は祈禱室になっている。小部屋の右手には厚いカーテンが垂れ下っていて、その向こうが処刑台をおさめた部屋だった。

元陸軍大尉、杉浦勝夫がこの部屋へ入ってきたのは午後八時五分だった。かれはMPの手をふりほどくようにして離すと、ひとりでしっかりと立った。室内は冷えこんでいたが、かれの額には汗が滲んでいた。

スミスが回りこむようにしてかれの前に立ち、ふたことみこと英語でしゃべった。二世の通訳は「もし、あなたが希望するなら、タバコを与えることが許されています」と通訳した。杉浦は首を振った。スミスはかすかに眉をしかめた。

津田神父は祭壇に近よって、ローソクに火をともした。その灯はしのびこんできた風に揺れて、幻想ではない現実の死の部屋に淡い光を投げかけた。

津田神父は祈禱室に杉浦をともなつて入った。神父は床にひざまずき、

「天なる神にお祈りを捧げましょう」と言った。

「神父さん」と杉浦が立ったまま低く囁れた声で言った。「わたしは、もう神なんて信じていません。神とか仏とか、そんなものを信じたところで、いまのわたしには少しも役に立ちません。わたしは、誓っていうが無罪です。わたしは、あいつらが言うような残虐なことはやらなかった。それなのに、わたしはこうして処刑されようとしている。こんな莫迦なことが——」

津田神父は顔を挙げてさえぎった。

「わたしたちの魂はすべて神のものなのです。あなたの魂は、いま盲くらしいているのです。あなたもわたしも、この外にいるものたちも、すべて神の子であり、神に祈ることによって救われるのです」

それをきくと、杉浦は口もとを歪めた。

「神父さん。あなたのいうように、神があるものならば、罪もなく処刑されようとするわたしを救ってくれるはずじゃありませんか。しかし、ここまできてはもう駄目だ。神でもだれでも救うことはできない。もしそれができるものがあるとすれば、それはあいつらの司令官だけです」

「わたしは」と神父はなおも言った。「あなたのために祈ります」

津田神父の眼には涙があふれていた。きらきら輝くそれを見て、杉浦は顔をそむけ、迫りくる死への絶望でいっそう噎れた声でつぶやくように言った。

「戦犯は遺骨も渡されないのですね。そう聞いていたので、ツメを切って残しておきました。わたしのベッドの片隅に紙にくるんでかくしてありますから、家族がきたら渡してやってください。それからこう伝えてくれませんか。お父さんは絶対に悪いことはしていない、とね」

そう言うと、杉浦は自分から先に祈禱室を出た。

声にはならない呻きのようなものが、MPたちの口からもれた。スミスが合図すると、MPたちは杉浦に黒い布で眼かくしをし、手錠をかけた。

津田神父の眼前のカーテンが開かれ、米人たちと杉浦の姿をのみこんで、再びもとのように垂れ下った。神父の身体じゅうの血管という血管が一時に拡がり、激しい脈動が胸を締めつけた。

あの決して馴れることのできない感情が、再び津田に襲いかかってきた。背筋を硬直させ、かれは祈りに沈んだ。カーテンにへだてられてはいても、津田は杉浦の首にたれ下った絞縄が巻きつけられるのをはつきり見ることができた。思いだった。

奇蹟は起らなかった。激しい音がひびき、その響きはこの実りのない大地に吸いこまれて消えた。

第一章 歪んだ罫

十数年後、東京はほぼ完全に復興した。戦後すぐのころは、上野駅の名物だった地下道の住人たちは、拭いとられたように姿を消し、買い出し客の行列で賑った駅の構内も、冬ともなればスキー客の列車にとってかわった。悪夢の時は、すでに幻影と化して、十数年前の地獄の様相は人々の記憶の裏にかくれていた。

上野駅を常磐線の急行にのって二時間ほど走り続けると、乗客は列車の右手に、キラキラと白く輝く湖を見ることができると。それは千波湖と呼ばれているが、周囲は一里にみたく、湖というより沼に近い。

一九六〇年一月中旬のある日、この千波湖の周囲に沿った県道の上を二人の子供が歩いていた。